

---

# ストリート

3007

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ストリート

### 【Nコード】

N6967H

### 【作者名】

3007

### 【あらすじ】

一人のストリートミュージシャン。彼が作った曲には誰かの気持ち書かれている。そしてこの曲を聴いた人は・・・

夜の都会には様々な人がいる。道路一つ挟んだだけで別世界になってしまふ、そんな十人十色なこの世界。

空を見上げりや大きな月が見えるだけ。お星様なんてとつくの昔に消えてしまった。ましてやこれ程大きな月だつて都会の人には見知らぬ存在。そんな都会で今日も一人曲を奏でる。

人間は勝ち組と負け組の二種類に分けれる。人によつて価値観は違ふが要するに金があつたら勝ち組で貧乏人は負け組という事だ。「貧乏でも幸せ」こんな事を言つても勝ち組の人達は毎晩肉をおかずワインを飲んでる。そんな勝ち組の人間は今日も両手に花で夜の都会を闊歩している。

色鮮やかな光でコーティングされたこの街。そんな高級な香りがあるこの場所で一人雑巾を巻いた様な格好で地べたに座り曲を奏でる一人の青年。そんな青年と目があつた勝ち組の人。

「何や兄ちゃん。こんな所で弾き語りか？ 仰山儲けているな」

その声は街中の人に聞こえ周りの人達は彼の貧相な姿とギターケースに入ってる数枚の小銭を軽蔑な眼差しで見つめて嘲笑うかの如く上品に笑っている。

「どうですか、一曲聴いていきませんか」

青年の低姿勢な態度に気分を良くした勝ち組の人。

「よしつ、ここで会ったのも縁だ。兄ちゃんの曲を聴いてやろう。ついでにセンスがあつたら俺が良いプロダクション紹介してやる」

勝ち組の人がそう言うつと青年は立ってギターのチューニングを始めた。

「おつ。本気を出すのか？これは見物だな」

勝ち組の人がそう言うつと両手に抱えられた蝶達も彼の曲を聴こうとニヤニヤと笑い出した。

「この曲はある人の奥さんの気持ちを歌った曲です。聴いてください」

そう言うつと小ばかにする様な拍手と共に一曲限りのコンサートが始まった。

「あなたが言ったあの一言『お前を幸せにする』不器用なあなたが言ったあの一言。

私はそれを信じていた。でも、あなたは同じ言葉を沢山の蝶に掛けていた。最初はあなたも隠そうとした。だけど、いつしかその気も無くなり毎日仕事が忙しくなった。あなたが帰ってきてくれる様に私は頑張った。だけど、あなたは鮮やかな蝶から貰う蜜の方が好きだったのね。いつしか寝る時には薬指の指輪を外すようになった。ダイヤモンドの光は私の目には眩しすぎた。最近ではあなたの帰りを待つのも疲れました。だけどあなたの事を愛しています。こんな気持ちを知らずに指輪は光っています。だから外します。私はあなたの言葉を信じています。

裏切られたくないから私はあなたの事を一生待ちます。だから最後

に言います。さようなら」

歌い終わると青年は何も言わずギターをしまつて歩きだした。

「おい。この歌は何だ」

勝ち組の人から妙に冷たい汗が流れている。

「最初に言いました。ある人の奥さんです」

青年は立ち止まり背中を向けたまま答えた。

「だから、誰の事を言ってるんだ」

勝ち組の人は震えながら青年の肩を掴んだ。

「自分は歌を歌っただけですから」

青年がそう言うと勝ち組の人は掴んでいた手を外して携帯電話をポケットから出して急いで連絡を取り始めた。そして、青年はその場から姿を消した。

「只今電話に出れません。すいませんが改めて連絡を下さるかピー」という発信音の後にメッセージをどうぞ」

勝ち組の人はこの声を聞くと二匹の蝶をほったらかしにして自分の自宅へと走り始めた。

高級マンションの最上階。勝ち組の人が急いで自分の部屋の玄関を開けてリビングに行くところには一人の女性が首を吊っていた。そして、床には左手の薬指と真つ二つに割れた指輪が赤く光ながら落つちちている。

この光景を見た勝ち組の人はすぐに救急車を呼んだ。

「私は人を殺しました」

この一言を言うと勝ち組の人は電話を切った。そして、リビングへと行きこの金と銀で塗りたいくられた街から消え去る事を決めた。

そんな愛する人を間違ってしまったこの男性。一人の女を必死に愛するよりも複数の女を愛した方が男として鼻が高かったのだろう。しかし、夜の都会にはこの男と間逆な人間も歩いている。

5

同じ靴に同じネックレス、右腕には同じ模様のタトゥー。

見ただけで好きな者同士何だと分かる男と女。容姿を見たら夫婦というよりカップルだと間違えてしまうぐらい若い二人。高校の同級生で高校1年生の時から付き合っており卒業と共に結婚をした。

現在19歳とまだまだ遊び足りない時期なのか夫婦二人で夜の都会を遊び歩くのが日課となっている。二人共働いているとは言え、毎日の様に遊び歩ける程裕福な生活が出来ているという訳では無い。しかし、衣食住のどれかを切り詰めてでも夜の街に出掛けてしまう。それぐらい二人にとって夜の街とは中毒的な存在だった。

午前2時。だいたいこの時間になると明日の仕事の為に家へと帰り始める。

この時間の住宅街は全く光が無く妙な明るさをはなつ電灯を頼りに進んでいく。こつこつという気味の悪い道も二人にとっては何とも無く普段通り手を繋いで歩いている。すると2個先の電灯に一人の青年が座っていた。

「ねえ、こんな時間に誰か居るよ」

そう言つと女の手を握る力が強くなつた。

「心配するなつて。ただの酔つ払いだよ」

男が言つと女は少し安心した表情をして歩き出した。

そして、二人が電灯の前まで来ると青年は喋りかけてきた。

「どうですか、一曲聴いていきませんか」

青年が二人に言つと通り際に男が「いらねえよ」と一言いつて二人は青年の方を見向きもせず自宅へと向つた。そして、二人が5歩ぐらい進むと青年が口を開いた。

「だったら強制的に聞いて貰います」

青年が二人に聞こえるぐらいの小さな声で言つと二人は歩くのをやめた。というより二人は止まつた。

男は必死に動こうとするが全く動かず大声をあげようとするが声すら出ない。その状況は女も一緒に女は恐怖で泣きそうになるが涙すら出ない。

「少しの時間なので安心して下さい」

この状況で冷静に喋る青年が余計に恐怖を感じさせる。

そして、青年はギターを担いで立ち上がり段々と二人の方へと近づく。そして、青年が二人の前に来た。

「これはある赤ん坊の気持ちを歌った曲です。聴いてください」

そう言うと沈黙の中、一曲限りのコンサートが始まった。

「好きな人と結婚出来て幸せな毎日を過ごしているお父さん、お母さん。

僕はあなた達の幸せの為に利用された道具なんだよね。僕が出しているSOSも無視されて気が向いた時だけ育児をしている。

あなた達の周りでは鴛鴦夫婦で尊敬されているけども、所詮は世間を知らない馬鹿な集団。世間であなた達を認めている人は一人も居ないんだよ。

色々不満はあるけども僕に暴力を振るう事はしなかった。だけど、そこに愛があつた訳じゃない、それも自分達の幸せの為だった。今の自分には泣いて気持ちを伝える事しか出来ない。だから毎晩泣いています。あなた二人に届くことの無い、一生分の恨みの涙を今日も一人で流しています」

歌い終わると青年は何も言わずギターをしまつて歩きだした。

そして、青年が見えなくなった頃、女だけが膝から崩れて溢れてくる涙と共に恐怖と絶望感を感じた。そして、電灯が点かなくなつて暗闇となつた道を女は一人で歩き始めた。「これは夢だ」と何度



も言つて自分の家へと向つた。そんな光景を見て固まつたまま涙を流した一人の男。

そして、ボロボロなアパートのボロボロな階段を上がりボロボロな部屋に入るとそこには幸せそうな笑顔の赤ん坊が一人で眠っていた。その赤ん坊を見て女は又、泣いた。夜鳴きする赤ちゃんの如く号泣した。

翌日、19歳の男性が道端で死んでいるのを発見された。そして、その現場の片隅で一人の青年が曲を奏でていた。

「自分達の幸せの為に我が子を犠牲にした愚かな二人。多くの人間はこの夫婦を外道だと批判をするが、この夫婦の様に幸せの為に何かを犠牲にするという事は程度の強弱はあるが誰しもが経験する事だ。しかし、人間は自分が幸せになると全世界が幸せ何だと錯覚を起こして犠牲にした物の事など考えなくなる。そんな凶悪な考えを持つ人間。全ての人間が居なくなるまで『幸せ』という言葉は生まれてはいけなかったのではないのか」

この曲を歌い終わると青年はギターをしまつて歩き出した。

そんな十人十色なこの世界で今日も一人曲を奏でる。

(後書き)

今回はお読みいただきまことにありがとうございます。この作品夏のホラー2009に出した作品です。他の作者様の作品も是非お読み下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6967h/>

---

ストリート

2010年10月11日13時03分発行